



Ⅱ 男声合唱組曲「雨」 指揮 北村協一
雨の来る前 作曲 多田武彦
武蔵野の雨
雨の日の遊動円木
十一月にふる雨
雨の日に見る
雨

男声合唱組曲「雨」について

多田武彦

雨は、人間にとっては、随分と親しい間柄である。そのうっとうしい自然現象は、昔から人間にいろいろな孤独感や悲哀感を与えてきた。同時に、雨があがるときの、あの清らかな、すがすがしい気分をも、しみじみと人間の心に伝えてくれてきた。

そういうさまざまな雨と、そのときどきの人間の心との交流を主題にして、私はこの作品を、心をこめて書いてみた。

第1曲の「雨の来る前」は、昭和35年度全日本合唱コンクール課題曲入賞作品であるが、かねてから、これに数曲を続けて組曲にしたいと考えていた。

そこで、まず第1曲と第2曲「武蔵野の雨」によって、自然現象としての、力強い、うっとうしい、わびしい雨をとらえた私は、第3曲「雨の日の遊動円木」では、人のいない雨の日の、児童公園の冷たい風情のなかに、人間の孤独感をにじませ、第4曲「十一月にふる雨」では、突き刺すようなモチーフのたんたんとした繰り返しによって悲哀感を盛りあげてみた。

そして、第5曲「雨の日に見る」では、冬の雨の日の、あのもやのかかったような冷気を通して、孤独感や悲哀感に打ちひしがれた主人公が、庭に見事にみのったザボンの実——（ある人にとっては、それは到底実現しそうにもない輝かしい理想であり、ある人にとっては、それは手のとどかないところにいる恋人でもあるが）——と離れてじっとすわっている姿を浮影にし、第6曲「雨」では、こうした悩みや苦しみに昇華し切った主人公が、あふれ出ようとする涙をおさえて、しみじみと歌いおえる曲想とした。

この組曲ができたとき、私は「今後いつでも作曲の筆を折っていい」と思ったし、とりわけ第6曲「雨」は、私の臨終における鎮魂曲として、私の心の奥深く刻みこまれてしまった。